

日本語学習者の会話における「ノダ／ンデス」の 使用実態に関する一考察

塚原真紀

[キーワード] 「ノダ／ンデス」、使用実態、脱落、付加、母語

1. はじめに

「ノダ／ンデス」は上級学習者にとっても使用が難しく、教師にとっても指導が難しい項目である。しかし、特に話し言葉において、現実に応じた時に用いられる「ノダ／ンデス」の習得が難しいのかは、よく分かっていないと思われる。そこで、実際の発話における学習者の「ノダ／ンデス」の使用を正用・誤用の観点から分析し、その実態を明らかにしたいと思う。この「ノダ／ンデス」とは、文末や発話末、従属節末の表現である。なお、形式名詞や終助詞の「の」は含まない。ここでは、書きことばに現れるものをカタカナ表記の「ノダ」、話しことばの場合を「ンデス」で代表させる。平叙文や疑問文など各表現形式はひらがな表記で「のだ」「んです」「んですか」「なんですけど」などとする。

2. 先行研究

学習者の「ノダ／ンデス」に関して、その使用意識を考察している研究がある(大場 1995 佐々木 1995)。日本語母語話者(以下、母語話者とする)と比較して学習者は「ノダ／ンデス」の使用意識が低いこと、理由や根拠を尋ねたり述べたりする場合の「ノダ／ンデス」の使用意識がもっとも高いこと、「ノダ／ンデス」の前提となる文脈や状況がない場合や感情的な含みを持つ場合は使用意識が低いことが指摘されている。

学習者の実際の使用を分析した研究には、書きことばの作文を対象に「ノダ」の誤用を扱ったものがある(小金丸 1990 葉 1990 山本 1995)。これらの研究から、「ノダ」の誤用には脱落や不必要な付加があり脱落の誤用のほうが多いこと、脱落は疑問文や「んじゃないか」「んでしょう」などで多くみられ、不必要な付加は「のだから」や冒頭文での「のだ」でみられることが分かっている。しかし、学習者の発話でも同様の傾向がみられるかどうかは分かっていない。谷守(1996)は、研究発表時の発話資料を用いて「日本語上級習得者」の言語運用の特徴として「ンデス」の使いすぎや誤用がみられるとしているが、「ンデス」自体は詳しく考察していない。

神田(1998)は、要求・依頼の談話における使用状況を、6ヶ月の初級コースを修了した学習者6名の、約2年に渡る8回のロールプレイの発話を対象に考察している。そして、学習者間の個人差が大きく、習得が進んでいない学習者は「～たいんです」など接続する表現が限られているという結果を得ている。しかし、ここで分析された発話資料はその性格が限定されていると言える。なぜなら研究発表は前もって準備できるし、ロールプレイは設定された場面であり表現も限られるからである。学習者の使用実態をさらに考察するためには、できるだけ自然な場面の会話をデータにする必要があると思われる。そこで、実際の学習者の会話では、どれくらい「ンデス」が使用され、それはどのような用法においてなのか、また、誤用はどんなところに現れるのかを具体的に考察していくことにする。

3. 方法

予備調査として質問紙調査を実施し(以下、意識調査)、その結果をもとに使用実態を把握した。意識調査で、学習者の母語(韓国語、中国語)ごとに比較したところ、学習レベルが同じであっても韓国語母語話者のほうが、「ンデス」の使用意識が高かった。実態調査でも両者を比較するために、対象者を韓国語(K)と中国語(C)を母語とする学習者各5名にした。計10名のうち、6名(K2、K4、K5、C2、C4、C5)が筆者と初対面であった。C4、C5を除いた8名は日本語上級レベルで、C4、C5は日本語中級レベルであった。実際には学習者と筆者が対談を行い、その際の学習者の発話のみを分析した。1組あたり約30分録音し、そのうち最初の5分を除き15分間分を文字化しデータとした。

(韓国語母語話者)

K1: 男性 大学院1年生 生物学専攻

日本滞在歴-1年4ヶ月 日本語学習歴-1年6ヶ月(クラスは5ヶ月)

K2: 男性 研究生(1ヶ月後に、大学院入学) 電子情報専攻

日本滞在歴-6ヶ月 日本語学習歴-1年6ヶ月(うち、塾で1年)

K3: 女性 研究生(1年間の短期留学生) 日本語、日本文化専攻

日本滞在歴-5ヶ月 日本語学習歴-5年(うち、教授経験1年)

K4: 女性 研究生(1ヶ月後に、大学院入学) 日本語、日本文化専攻

日本滞在歴-1年5ヶ月 日本語学習歴-8年

K5: 女性 研究生(1ヶ月後に、大学院入学) 教育工学専攻

日本滞在歴-10ヶ月 日本語学習歴-4年6ヶ月

(中国語母語話者)

C1: 男性 大学院1年生 英語学専攻 日本滞在歴-3年10ヶ月
日本語学習歴-3年10ヶ月

C2: 女性 大学2年生 国際総合専攻 日本滞在歴-3年6ヶ月
日本語学習歴-3年6ヶ月(うち日本語学校で1年半) 母語-広東語

C3: 男性 大学4年生 法律専攻 日本滞在歴-5年6ヶ月
日本語学習歴-5年6ヶ月(うち日本語学校で1年半)

C4: 女性 大学院3年次編入予定 工学専攻 日本滞在歴-5ヶ月
日本語学習歴-1年3ヶ月

C5: 女性 研究生 日本語教育専攻 日本滞在歴-10ヶ月
日本語学習歴-6年 母語-広東語

4. 結果と考察

4. 1 「ンデス」の正用実態

4. 1. 1 使用状況

全データ中、従属節末と発話末で使用された「ンデス」は計183例で、そのうち166例が適切であった。では、全体でどの程度「ンデス」が用いられたのだろうか。メイナード(1993)の「文」の単位をもとにして学習者の発話のみを抜き出し、全発話中における「ンデス」の割合を求めた。その結果、学習者の総発話数は1168で、「ンデス」の使用率は14.2%であった。これまでに調査されている母語話者の使用率(野村1995 メイナード1997 丸山1998)は約30%前後であり、学習者の使用率は約半分にとどまっていると言える(表1)。

表1: 学習者のンデスの使用状況

	ンデス発話			総発話数	使用率
	発話末	従属節末	計		
使用頻度	121 (72.9%)	45 (27.1%)	166	1168	14.2%

トーク番組の会話で母語話者の使用実態を調査した丸山(1998)と比較したところ、本データ中に現れた「ンデス」の特徴として、従属節末の「んですけど」が多いことが分かった(学習者

27.1%：母語話者 12.6%)。また、学習者によっては特定の表現形式のみで「ンデス」を用いる傾向があり、これは神田(1998)と同じ結果であった。たとえばK3の使用は、16例中15例が、発話末、従属節末の「んですけど」で、C5の正用は「そうなんです」に限られていた。特定の表現形式のみ習得されているという偏りがあるのではないかと思われる。

また、中国語母語話者の使用率(8.2%)は韓国語母語話者(21.1%)よりも低く、日本語学習レベルの低いC4、C5を除いた中国語母語話者の使用率(11.2%)でも、依然として韓国語母語話者より低い。しかし、韓国語母語話者の中でも使用率には個人差がみられる。K2、K5は使用率が25%を超えており、母語話者にかなり近いと言える(表2)。

表2：学習者ごとの「ンデス」の正用

話者	総発話	ンデス発話	使用率	話者	総発話	ンデス発話	使用率
K1	136	16	11.8%	C1	156	3	1.9%
K2	84	22	26.2%	C2	112	10	8.9%
K3	95	16	16.8%	C3	168	36	21.4%
K4	97	16	16.5%	C4	93	0	0%
K5	134	45	33.6%	C5	93	2	2.2%
計	546	115	21.1%	計	622	51	8.2%

4. 1. 2 正用の用法による比較

ここでは、田野村(1990)、野田(1997)を踏まえて、先行発話に前提となる事柄があるかどうか、表現形式が何かという点を中心に「ンデス」の用法を以下のように分類した。用例は、データ中の学習者の実際の発話である。(破線は前提となる先行発話を示す。)

①《説明》前提となる事柄が先行発話にあり、その背景となる理由や事情を述べる。平叙文で主に「んです」の表現形式をとる。

(1) K1: でも、わたしは図書館とか家でできる研究がうらやましい。実験室嫌になっちゃうんです。(笑い)

②《前件/説明》複文の前件で、背景となる理由や事情を述べる。前提となる事柄が先行発話にある。従属節末の「んですけど…」の表現形式をとる

(2) K1: うん。でもあいさつもできなかった。あいさつぐらいはちゃんと覚えていたんですけどー、慣れなくてー、口の外に出ない。

③《提示》新しい話題を提示する。前提となる事柄が先行発話にない。平叙文で主に「んです（よ）」の表現形式をとる。

(3) C3:あと、1月15日もあるんだよ。元正ということもあるんだよ。

④《前件／提示》複文の前件で、新しい話題を提示する。前提となる事柄が先行発話にない。従属節末の「んですけど…」の表現形式をとる。

(4) K3:で、この前、地域研究一の先生に手紙かいたんだけどー、ぜんぜん、あ、失礼だったかもー、(省)

⑤《帰結》ある事柄から導かれる結論、意見を述べる。「んです（よ）」の表現形式をとる。

(5) C3:多分今そう言う人たちはねー北京外国語、北京外国語大学とか出た連中だから、日本語うまいんだよ。うまいんだけどイントネーションあってないっていう場合もあるんだよね。ちょっとそれは生活しないと難しいんだよね。

⑥《YN質問》予想した事柄の当否を問う。「んですか？」の表現形式をとる。

(6) K2:進学するんですか？

⑦《WH質問》ある事柄の詳細を問う。「疑問詞～んですか？」の表現形式をとる。

(7) K4:ど、どちらに住んでいるんですか？

⑧《確認》理解した事柄を確認する。主に「んですね・よね」の表現形式をとる。

(8) K4:だったら、わたしが住んでたときも住んでいらっしたんですよねー。

⑨《納得》理解した事柄を納得する。「んですか↓・んだ」の表現形式をとる。

(9) K5:あ、岐阜じゃないんだ。栃木だ。(笑い)

⑩《非難》質問に非難の意味を含む。主に「疑問詞～んですか？・んだ」の表現形式をとる。

(10) C3:うん。今、一番忙しい時期なんだよ。どうやって帰るんだよ。

⑪《疑念》疑いの意味を表す。「疑問詞～んでしょう・んだろう」の表現形式をとる。

(11) どうして来ないんだろう。(データ中に正用例がないため筆者の作例)

以上の用法を中心に分類したところ出現頻度に差があった(表3)。《説明》や《提示》などが多かった。その理由としては、本データでは学習者が自分のことについて話す場面が多かったことがあげられる。逆に《非難》《疑念》は、そのような発話が現れる場面が少なかったため使用頻度も少なかったと思われる。

表3:用法ごとの「ンデス」の正用

用法	正用数	ンデスが必要な 発話数	正用率
①説明	55	77	71.4%
②前件/説明	35	44	79.5%
③提示	25	36	69.4%
④前件/提示	9	10	90.0%
⑤帰結	8	10	80.0%
⑥YN質問	6	11	54.5%
⑦WH質問	4	5	80.0%
⑧確認	7	7	100.0%
⑨納得	4	10	40.0%
⑩非難	3	3	100.0%
⑪疑念	0	2	0.0%

この他、《応答》「そうなんです(3例)」、《推定》「んじゃないですか(1例)」と《伝聞》「んだって(1例)」などがみられた。これらは、意識調査で対象外だったため、今回の分析対象からも除くことにした。

(12) J1: 今、じゃあ、あの一寮ですか? C5: そうなんです。《応答》

(13) K5: 奨学金もらっているから一、多分払ってくれるんじゃないかですか。《推定》

(14) C3: これはねえー、なんか難しいんだって。作文書くより手紙書く方が。《伝聞》

4. 2 「ンデス」の誤用実態

「ンデス」の誤用を脱落・不必要な付加ごとに、どのような例がどんなところに現れたかを考察した。全データに現れたンデスの発話183例中、不必要な付加は17例あった。さらに、脱落は59例あり、誤用は全部で76例であった(表4)。

表4：学習者ごとの「ンデス」の誤用

話者	ンデス 発話	脱落	不必要 な付加	話者	ンデス 発話	脱落	不必要 な付加
K1	16	1	4	C1	3	19	0
K2	22	1	2	C2	10	13	1
K3	16	0	0	C3	36	0	2
K4	16	0	1	C4	0	13	0
K5	45	0	6	C5	2	12	1
計	115	2	13	計	51	57	4

4. 2. 1 脱落

ここでは、特に「ンデス」の必要性が高いと考えられる発話での脱落を取り上げる。脱落は、中国語母語話者が多く、韓国語母語話者は少なかった。また、学習レベルが低いほど脱落は多く、学習が進んでいる者ほど少なかった。脱落が生じた用法は以下の通りである。

表5：用法ごとの「ンデス」の脱落

用法	脱落数	ンデスが 必要な 発話数	脱落率
①説明	2 2	7 7	28.6%
②前件／説明	9	4 4	20.5%
③提示	1 1	3 6	30.6%
④前件／提示	1	1 0	10.0%
⑤帰結	2	1 0	20.0%
⑥YN質問	5	1 1	45.5%
⑦WH質問	1	5	20.0%
⑧確認	0	7	0.0%
⑨納得	6	1 0	60.0%
⑩非難	0	3	0.0%
⑪疑念	2	2	100.0%

用法ごとに脱落を比較してみると、合計数が少ないものの《納得》《YN質問》《疑念》での脱落が多いことが分かる。逆に《確認》《非難》では、脱落がなかった。また、表現形式では「んですけど」において脱落が少ない。この結果から「んですけど」という表現形式では「ンデス」の学習が進んでいることが分かる。以下に、実際の誤用例を示す。(破線は前提となる先行発話、実線は脱落箇所)

①《説明》

(15)C1: (中国残留孤児の話) そう。ちよつとかわいそうですね。

大勢の人があの、農村の方に、あの一ずっと・・・にいる、生活してあんまり字が、字を読めない人、結構いる。<→結構いるんです>

「字が読めない人が結構いる」だけでは、「かわいそうですね」との関連が弱い。これを「結構いるんです」とすれば、かわいそうだと思う理由として関係づけられ、発話のつながりが自然になる。

②《前件／説明》

(16) C2: でも荷物は結構いっぱい。・・・服は多いけど、ちょっとはずかしい。

<→服は（正しくは「が」）多いんだけど>

この「服は多いけど」は、その前の荷物が結構いっぱいあるという発話を受け、その事情を説明しているので、「ン德斯」を用いて「多いんだけど」としなければならない。

③《提示》

(17) C1: (お酒の話) あとは、続けてずーっと飲んじゃう。

J1: あ、そうなんだ。

C1: あと、タバコはね、あの一、あのみんな吸うよ。そしてタバコは渡す。それはあの一日常の挨拶みたい。<→みんな吸うんだよ>

これまでの酒の話題から次のたばこの話題に移る発話である。「あと、タバコはね、あの一、あのみんな吸うんだよ」が適当だと思われるが「ン德斯」が脱落している。

⑤《帰結》

(18) C1: 1年生は12人。2年生は一、10人ぐらい。もう卒業した。

J1: あ、そうか。

C1: うん。少ないですね。うん。だからなんかソフト大会のときあの一、英語教育コース一番弱いです。<→弱いんです>

人数が少ないためにソフトボール大会で英語コースが弱いという結論を導き出している発話である。しかし、「人数が少ない」と「ソフトボールが弱い」ことは必然的に導かれる関係ではない。従って話し手は、「ン德斯」を用いて帰結として関連付けなければならない。

⑥《YN質問》

(19) J1: 森みたいな感じ。(笑い)

C4: (笑い)

J1: なんかね、こういっばいこうしてー、あるの。(絵を描く)

C4: うん。 うん。

C4: 山、あ、「花森」、「花森」という言い方ある？<→あるの？>

これは桜の花が森みたいに見えるというJ1の発話を受け、C4が「花森という言い方がある」のかと、予想した事柄について質問しているので「あるの？」または「あるんですか？」が適当である。この《YN質問》は意識調査の結果と比べると、本調査での脱落の誤用が多い。

⑨ 《納得》

(20) C2: え、どうやってRさんに知り合ったの？

J1: (省略) アンケート調査で、留学生に配ってて、ここほら、留学生宿舎があるでしょ、そこをコンコンコンコンって回ってて、そこでたまたま、あの一、(Rさんが) 夕御飯か何か作ってたのかなあ、そこで、お願いしまーすってゆって (笑)

C2: ああ。 あーあー。

C2: あ、そうか。最初は一分からなかった。<→分からなかったんだ>

この「あ、そうか。最初は一分からなかった」は、先行するJ1の話から理解した内容を納得している発話なので、「最初は一分からなかったんだ」とすべきである。

⑩ 《疑念》

(21) C1: そう。でもおかしいですね。なぜ男の子しか、ほしくない。

<→ほしくないんでしょう>

正用例がなかった「なぜ～んでしょう」という《疑念》の誤用である。C1は男の子しかほしがらないある中国人に対して疑念を述べている。「なぜ男のしかほしくないんでしょう。」としなければならない。この《納得》と《疑念》の脱落は、中国語母語話者によるものである。意識調査においても中国語母語話者にとって《納得》と《疑念》は難しいという結果が出ており、今回の調査でもこれと一致する結果となった。

4. 2. 2 不必要な付加

不必要な付加の誤用は次の場合にみられた。

(ア)「から」に接続して理由を述べる場合に「んですから」とした誤用。8例

(イ)「じゃないですか」を「んじゃないですか」とした誤用。4例

(ウ)単純推量の「でしょう」を「んでしょう」とした誤用。1例

(エ)前提がない事柄について単に聞き手に尋ねる場合に「んです」を用いた例。3例⁽¹⁾

(オ)前提がない事柄について単に感想を述べる場合に「んです」を用いた例。2例

これらは、意識調査でも母語話者と比較した結果、特に多かった誤用である。今回の調査からも学習者が犯しやすい誤用として確認することができた。また、17例中13例が韓国語母語話者によるもので、脱落とは反対に、学習レベルが進んでいる者ほど不必要な付加がみられた。実際の誤用例は次の通りである。

(ア)「んですから」とした誤用

(22) C3: テレビだけだと一、二重音声ないから。あの一、おれ、洋画だと見るとき英語のやつ見
たいんだから、 <→見たいから>

J1: うん。

「英語のやつ見たいから」が正しいが、希望を表す「～したい」は「ン德斯」とともに用いられることが多いため誤用が生じたと思われる。「んですから」は、たとえば「ずっと待っているんだから、早くして」のように相手に働きかけをする発話で現れ、対談のような場面では少ない表現である。本データでは「んですから」が計8例みられたが、すべて誤用であった。このことから、学習者は「んですから」を誤って、そして頻繁に用いていることが分かる。なお、「んですから」は非難のニュアンスを帯びやすいが、観察された誤用にはどれもそのニュアンスはなく聞き手が不快感を受けることはない。「んですから」について学習者に確認したところ、「んですけど」と同様に使っているという意見があった。「けど」は、「～たいんですけど、～てくれませんか」などの依頼の前件や「先生、ここがちょっと分からないんですけど…」のように後件がない場合でも「ン德斯」とともに頻繁に用いられる。これが影響して不適切な「んですから」が生じているのではないと思われる。ところで「んですから」の誤用は、すべての「から」で生じているわけではない。「から」が適当である発話であるときは正しく「から」とするが、あるときには、「んですから」として誤まる。やはり「んですから」をいつ使うのか、あいまいに理解していると思われる。

(イ) 「んじゃないですか」とした誤用

(23) K4: 学生の場合、留学生とか、日本人も同じでしょうけど、普通寮から始めてどンドン出て
行くんじゃないですか。 <→行くじゃないですか>

「じゃないですか」は話し手が聞き手に認識をうながしたり、求めたりするときに使われる。しかし、推量を表す「んじゃないですか」と混同しやすく学習者にとっては難しいようである。また、「テレビを見るじゃないですか」を「テレビを見るんじゃないんですか」とした2個所で付加が生じた例もあった。

(ウ) 「んでしよう」とした誤用

(24) J1: へえ。教育工学かー。

K5: あんまりなれてないんでしょ。なじみが、<→なれてないでしょ>
前提となる根拠がない場面で用いている。

(エ) 単に聞き手に尋ねる場合に用いた誤用

(25) C2: わたし日本語話す時もー、広東語のアクセントを入っています。

J1: うん。 うん。

C2: 今、感じてないんですか？ 多分まだあると、思う。

<→感じてないですか？>

これはC2が広東語のアクセントを感じているかどうかJ1に尋ねる場面で、「感じてないんですか」としたために、C2が「J1は感じているはずだ」という判断を当然なものとして相手に詰問しているようなニュアンスが生じている。単に「感じてないですか」と問うのが適当であり、そうすれば話し手の主観は感じられない。

(オ) 単に感想を述べる場合に用いた誤用

(26) J1: でも、なん・・じゃ、具体的に、が、あの一教育工学の中の一どんなこと、

K5: どんなこと？研究テーマのことですか？なにか、面接みたいなんですねー。

<→面接みたいなですね>

K5の「面接みたいなんですねー」は、教育工学で何を研究したいのかというJ1の質問に対するその場の感想なので「面接みたいなですね」とすべきところである。この誤用は、意識調査でも

韓国語母語話者に多かった。

5. まとめ

5. 1 正用実態

- a. 学習者の使用率は母語話者の約半分であった。韓国語母語話者の使用率は中国語母語話者よりも高い。学習レベルによる差や個人差もある。
- b. 母語話者と比較して従属節末の「んですけど」が多く使われている。学習者によっては「んですけど」や「そうなんです」など特定の表現形式のみで「ンデス」を用いる傾向がある。
- c. 表現形式では「けど」に接続するほうが、発話末の「んです(よ)」より正用が多い。学習者をもっとも正しく用いることができるのは「んですけど」の形式である。先行発話に前提となる事柄があるかどうかというよりは、表現形式による違いが「ンデス」の使用に大きく影響している。

5. 2 誤用実態

- d. 学習レベルと母語による違いがある。学習レベルが低い者は脱落が多く、高い者は unnecessary 付加が多い。また、中国語母語話者は脱落が多く韓国語母語話者は unnecessary 付加が多い。

(脱落)

- e. 前提となる先行発話があるような典型的な「ンデス」の用法でも、脱落がみられる。
- f. 確認や「んですけど」で話題を提示する用法では「ンデス」の脱落が少ない。逆に納得を表す用法で脱落が多い。日常会話で納得を示す機会は多いと思われるが習得は進んでいないようである。「んですか？」で予想した事柄の当否を問う場合も脱落が多い。

(unnecessary 付加)

- g. 「ンデス」の unnecessary 付加が現れる箇所は限られている。特に「んですから」「んじゃないか」とする誤用が多く「から」と「んですから」の区別、「じゃないか」と「んじゃないか」の区別が学習者には難しいようである。
- h. 先行研究では指摘されていないが、前提とする事柄がない場合に単に感想を述べたり、質問する際にも「ンデス」が誤って用いられる傾向がある。

5. 3 指導への提言と今後の課題

前提となる先行発話の有無や「ンデス」の用法、表現形式を考慮して指導する必要がある。

先行発話を前提としている場合には、何を受けて「ン德斯」が用いられているのか示し、文脈や状況の中で「ン德斯」を提示する。そして、表現形式ごとに「ン德斯」を用いた場合とそうでない場合の意味の違いを学習者に比較させながら確認していくほうがよい。さらに、「ン德斯」が絶対に用いられない場合についても説明する必要がある。

また、「んですから」と「んですけど」は、接続詞「けど」と「から」の意味の違いに加え、「んですから」は「んですけど」に比べて使用が制限されることも教えなければならない。「んですけど」と「んですから」は前接する内容を聞き手が知っているかどうかという点で異なっている(野田1997)とされている。このような点を学習者に提示すれば誤りも減少するのではないだろうか。加えて、「んですから」は「当然～なのだから」という意味を含むことを強調すべきであろう。

母語の違いからも、韓国語母語話者には「んですから」など不必要な付加を、中国語母語話者には納得を表す用法などに注意させることができるだろう。母語による影響が「ノダ／ン德斯」にみられる理由として、類似表現からの干渉が考えられる。韓国語には、日本語の「ノダ／ン德斯」に相応する「(連体形)+것이다／(連体形)+것입니다」があり、中国語には「是…的」がある。「是…的」については、杉村(1982)で「のだ」との違いが指摘されている。今後、具体的に母語からの影響についてさらに考察していきたい。今回は学習者の母語を韓国語、中国語に限定したので、今後は調査の対象者数、発話データを増やし、その他の母語を持つ学習者についても調査していきたい。

脚1例で付加が重複している。

<主要参考文献>

- 大場理恵子(1995)「のだ」「のか」の習得上の困難点について『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学内日本言語文化学会研究会
- 神田紀子(1998)「要求・依頼の談話における「のだ」の使用状況と変化」『研究留学生にみられる日本語は発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』研究代表者尾崎明人科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書
- 小金丸春美(1990)「作文における「のだ」の誤用分析」『日本語教育』71 日本語教育学会
- 佐々木陽子(1995)「日本語学習者による「んです」に対する判断について」『平成7年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

- 杉村博文(1982)「是……的」－中国語の「のだ」の文－『講座日本語学 12 外国語との対照
Ⅲ』寺村秀夫ほか編 明治書院
- 谷守正寛(1996)「日本語上級習得者言語に見られる特徴」『日本学報』15 大阪大学文学部日本
学研究室
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野村眞木夫(1995)「日常会話における「のだ」発話－テキスト的な機能と対人的な機能に関す
る問題提起－」『表現研究』62 表現学会
- 丸山樹里(1998)「会話における「のだ」の機能」筑波大学卒業論文
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』日英語対照研究シリーズ:2 くろしお出版
—————(1997)『談話分析の可能性－理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- 山本忠行(1995)「中級学習者の作文に見る「のだ」の誤用」『創価大学別科紀要』9 創価大学
別科日本語研修課程
- 葉 照子(1990)「初級日本語学習者における「ノダ」の使用例からみた誤用の類型について」『九
州大学留学生センター紀要』2 九州大学留学生教育センター